

赤十字NEWS 1

Japanese Red Cross Society NEWS

JANUARY.2025.#1016

あなたの助けを必要としている人がいます

災害時に おける よう はい りよ しゃ 要配慮者 って どんなひと?

例えば...

視覚・聴覚障害の方
 外国人※
 妊産婦や乳幼児
 肢体不自由者

※日本語の理解が難しい方、海外からの旅行者など

など

CONTENTS

特集 | P.2

能登半島地震の「被災者の声」から誕生した救急法講習
見えなくても、命を救いたい

TOPICS

- 〈新年のご挨拶〉
150周年を見据え、使命感を持って
2025年も日本赤十字社は歩み続けます P.4
- 阪神・淡路大震災から30年
あのと、赤十字ボランティアは P.5

連載

- 万博と赤十字 P.4
- 献血ハートフルストーリー P.5

AREA NEWS

- [全国] 皇后陛下からご下賜
ゆずの手拭いに施設入所者も笑顔
- [秋田] 学生と地域住民が一体に
赤十字防災セミナー
- [埼玉] 5年ぶり!
大韓赤十字社とのボランティア交流会/他 P.6-7

WORLD NEWS

- 世界の赤十字が集結。「赤十字国際会議」がジュネーブで開催
国際会議で提言「初等教育から人道法を」 P.8



アイリスオーヤマ
ハイブリット加湿器
プレゼント! 詳しくはP.7をCheck! ▶

PRESENT!!

7名様

SPECIAL FEATURE | 特集

能登半島地震の「被災者の声」から誕生した救急法講習

視えなくても、命を救いたい

日赤が実施する救急法講習では、応急手当や心肺蘇生とAEDの使い方、災害時の心得などについての知識と技術を伝えています。昨年、AEDの一般使用解禁から20年の節目となり、AEDを用いた救急法普及のイベントが各地で実施された中、日赤神奈川支部では視覚障害者向けの心肺蘇生講習および防災講習が実施されました。この講習は、昨年の能登半島地震で被災した視覚障害者の声をきっかけに企画されたもの。被災する不安と向き合いながらも、視覚障害があっても身近な人を救えるという気づきも生まれた講習の様子をレポートします。

REPORT

誰かが倒れている、呼吸をしていない…

視覚障害がある方はAED使用の「指示」と「サポート」をし、胸骨圧迫を行う。まずはAEDを持ってくるように周りの晴眼者に依頼し、胸骨圧迫を開始。



指導員が自分の手に触れてもらい、レクチャー

血液を送り出す心臓のポンプを動かすには、かなりの力で胸骨を圧迫することが必要。掌の付け根の一点に力が集中するように、片方の手に、もう一方の手を重ねて両手の指同士を組み、下の指を反らせるようにする。手の組み方は、指導員が組んだ手を触って確かめてもらう



AEDの使用方法を聞く参加者たち。点字の使用説明を熱心に読む方も

AEDが到着したら正しく使用できるよう晴眼者のサポートを行う。まず、AEDのスイッチを入れ、機械の音声に従い衣服を取り除く。電気を流すパッドを素肌面に直接貼り付けるため、肌が濡れていないか、心臓ペースメーカーなどが埋め込まれていないか(皮膚が盛り上がっている)、貼り薬がついていないかを晴眼者に確認するよう助言し、心臓を挟む位置にパッドを貼ってもらう。その際、パッドと肌の間に空気が入っていないことも確かめて。その後もAEDのメッセージに従い救命活動を進めていく

CPR(心肺蘇生)は“強く、速く、絶え間なく”

AEDが到着するまでの間、傷病者の横に膝立ちになり、胸の真ん中を真上から垂直に、肘を曲げずに体重をかけて約5cm強く押し、心肺蘇生を行う。通常心臓が動くのと同じスピードが理想なので、1分間に100~120回を目安に

※晴眼者とは：視覚に障害がない人のこと

主催者の声

いざというとき、自分自身を、誰かを、守れるように



横浜市神奈川区視覚障害者福祉協会(かな視協) 会長 戸塚 辰永さん

私は点字による総合誌「点字ジャーナル」の編集をしています。能登半島地震の後、被災した視覚障害者から、避難所の生活に苦労をされた体験の寄稿がありました。それを読んで、視覚障害者が災害に備える勉強会が必要だと実感。しかし視覚障害者向けの講習はなかなかありません。そこでライトセンターに相談しました。初めは、防災のことだけ学べばと考えていましたが、防災とセットで救急法を学ぶ意義を聞いて納得。AEDの使い方まで聞いておけば、いざというとき、周りに伝えられますから、視覚障害者にも必要だと思います。防災備品も触りながら聞けたのが良かったですね。



副会長 清水 哲夫さん

私は企業の総務部にいましたから、視覚障害があってもAEDの訓練を受けていました。でも、ほとんどの視覚障害者はAEDに触ったことも見たこともないのでは。私の父は心筋梗塞で亡くなりました。心肺蘇生をあのとき知っていたら…、と考えるんです。今日は、参加者が、AEDはこんなに小さいけれど、こんな機能がある、と知っておくだけでもいいと思っています。それから、災害が起きたら私たちは避難所に行くのではなく、在宅で避難する備えが大切です。今回は防災グッズについても、火を使わずにお湯を沸かせる袋など、知らなかった物もあって、勉強になりました。

その「不安」を解消するために、まずはやってみる!



神奈川県ライトセンター事業課 調整監 大竹 雅人さん

「かな視協」の方から防災の講習を受けたいとご相談を受けたときは、難しいかもしれない、と躊躇いました。なぜなら、赤十字の防災セミナーは視覚障害者向けには作られておらず、教材には画像や映像が多用されていたからです。そのため、通常の防災セミナーではなく、赤十字救急法を視覚障害者向けにカスタマイズし、防災の情報も組み込んだ「短期講習」という形式でトライすることに。試行錯誤の上での開催でしたが、参加者の皆さんが興味を持ってAEDの使い方や心肺蘇生を体験し、積極的に質問もされて、実りのあるものになりました。視覚障害者にとって、防災や救急法などの情報が少なく、それをとても不安に思っているという当事者の思いを知ることができました。今回が初の試みでしたが、今後も、障害を持つ方たちに向けたセミナーを構築していく必要があると感じています。

TRAINING

視覚障害者向けの防災&救急法講習

日赤は、人命を救う方法や健康で安全に生活するための知識と技術を伝えるため、全国で講習を行っています。その講習の1つが「救急法」です。本講習では、人工呼吸や胸骨圧迫の方法、AED(自動体外式除細動器)を用いた電気ショックのほか、骨折した場合の固定など応急手当の基本、災害時の心得などについての知識と技術を習得します。しかし今回は通常の講習と異なり、視覚障害がある方の「感覚」を重視し、見えない場合でもできる内容に絞った講習会が実現しました。

災害に備えて防災グッズの使い方を確認

どこに何があるか分からない避難所での生活は極めて困難。とくにトイレの問題は深刻。できる限り在宅避難できる備えを。



携帯用あたためキット、安全靴…最新防災グッズに興味津々の参加者

講習会場には、火を使わず水を沸かす携帯用あたためキットや、瓦礫やガラスの破片から足元を守る防災シューズ(安全靴)、倒れた家具に囲まれ、動けないときに場所を知らせるホイッスルなど、さまざまな防災グッズが用意され、その必要性を学んだ



形状や素材の質感を触って確かめる 保温効果の高いシュラフ(寝袋)や体を包めるサイズの断熱シートなど、寒い季節に欠かせない防災グッズの備えを確認



INTERVIEW

目が見えなくても人を助けることはできる 大きな災害が起きたら、「共助」の一員に



神奈川県視覚障害者支援赤十字奉仕団 神奈川山岳赤十字奉仕団 防災ボランティアリーダー・救急法指導員 早川 正志さん

神奈川県内で防災ボランティア・救急法指導員として活動。山岳赤十字奉仕団として、視覚障害者の山岳ハイキングに同行するなどのサポートも行う。

今回、講習の依頼が来た当初は、防災講習がメインで、心肺蘇生というのは「かな視協」さんのオーダーには入っていませんでした。しかし、災害時は自助だけでなく、共助も重要です。広域で大きな災害が起きると、県警のヘリコプターや消防の救急車などは数が足りず、全ての人を救うことはできない。公助に頼ることが難しいので、防災講習では、心肺蘇生、AED、止血をセットで伝えていきたいと考えています。そのことを説明して、協会の皆さんにも理解していただきました。私は救急法の指導員や防災セミナーの講師を務めていますが、赤十字奉仕団として視覚障害者の援助や、視覚障害者とハイキングに行くなどの活動をしています。その経験から「視覚障害の方でもできること」を考えました。実際に、一次救命の基本対応で、できることはたくさんあります。ま

神奈川県ライトセンターとは

神奈川県内の視覚障害者に対して、点字・録音図書などの情報提供や各種相談・訓練のほか、視覚障害者へのボランティア活動を志す人々の育成・支援も行う。昭和49年に県によって設置され、日赤神奈川支部が運営。平成5年には新たにスポーツ振興事業を加えるなど、視覚障害者のニーズに応える形で事業の拡充・充実を進めている。

講習参加者の感想



サノさん

50年以上視覚障害者として生きてきて、一度もこういった講習を受けたことはありませんでした。いざというときのために少しでも自分にできることはないだろうかと思って、今回参加しました。講習の内容は知らなかったことばかりで全部ためになりました。



スズキさん

AEDを直接触って使ってみる機会はないかなかったので、貴重な体験でした。視覚障害者を持っていると、一般の講習に参加するのは躊躇する部分があるので、今回視覚障害者団体でこういう機会を用意していただいたのはとてもありがたかったです。



イケガミさん

ひとり暮らしなので、災害については強い不安があります。以前からこういった講習に参加したいと思っていたので、もしものときの訓練ができたことがうれしかったです。改めて備えるべきことが確認できました。

講習の様子を動画でも紹介しています。

詳しくはコチラ



T P I C S

新年のご挨拶

150周年を見据え、使命感を持って 2025年も日本赤十字社は歩み続けます



日本赤十字社社長 清家 篤

自然災害に 翻弄された2024年を経て 気候変動対応も さらなる重要課題に

新年、あけましておめでとうございます。年頭に当たり、皆さまにとりまして今年が良い年となりますことを心からお祈り致します。また、日頃より日本赤十字社に賜っておりますご支援に対しまして厚く御礼を申し上げます。

昨年、元日に能登半島地震、9月にはその被災地に大雨災害と、能登半島は甚大な被害に見舞われました。被害に遭われた全ての方々に、心よりお見舞い申し上げます。日赤は、発災直後から救護班などを派遣し、総力を挙げて救護活動を実施し、また多くの赤十字ボランティアも駆け付け、復興に向けて被災者に寄り添った活動に力を注いでいます。さらに7月には秋田・山形を中心とした大雨災害、

8月には西日本で台風10号の被害など、自然災害は頻発しています。

こうした災害への対応力を高めるため、日赤では、救護員のさらなる実践力の向上、赤十字防災セミナーや講習事業の推進、さらに気候変動の影響による人道課題への理解・関心を深めるための取り組みもはじめています。

「いのちと健康、尊厳を守る」 この使命を胸に、さらなる進化を

海外ではウクライナやパレスチナでの武力紛争はもちろん、その他の地域でも武力紛争は絶えません。現在、世界の人口の4分の1はそうした紛争地域での生活を余儀なくされているともいわれています。

こうした中で昨年10月には、赤十字・赤新月国際会議がジュネーブで開催されました。そこでは「国際人道法の遵守に向けた普遍的な文化の醸成」や、「武力紛争中のICT活動に

よる潜在的な人的被害からの民間人およびその他の対象者・対象物の保護」などについて議論を交わし、日赤は、初等教育から人道教育を取り入れることを働きかけて日本政府と共同誓約を発表しました。

今年4月には大阪・関西万博が開幕し、日赤も出展致します。赤十字の理念を実践し普及する「赤十字運動」にちなみ、パビリオン名は「国際赤十字・赤新月運動館」としています。「人間を救うのは、人間だ。」というテーマのもと、「私たちには人を苦しみから救うチカラがある」と、感じていただける展示を制作中です。

日赤は「人間のいのちと健康、尊厳を守る」使命を帯びて時代と共に事業を拡大させて進化し、2年後には150周年を迎えます。これからもその使命を実現し続けるために、皆さまとの絆をさらに強め、今年も真摯に活動を続けてまいります。



vol. 4

万博と赤十字

2025年4月に開幕する大阪・関西万博には、赤十字の理念を伝える「国際赤十字・赤新月運動」のパビリオンも出展されます。本連載では万博と赤十字の150年以上にわたる関係をひもときます。



©Expo 2025

4月13日開幕! 赤十字を心で感じる万博パビリオン

お話を伺った人 日本赤十字社 広報室 大阪・関西万博準備室長 山田一郎さん

私は、長年勤めていた家電メーカーを辞め、万博準備室の室長として、昨年、日赤に着任しました。前職はテレビCMなどの商品PRに携わっていました。一見、異なる分野のようですが、より多くの人に共感していただくメッセージをお届けする点において、相通じるものがあると思います。

「なぜ日赤が万博に出展を?」と思う方もいるかもしれません。しかし、日赤の創設者・佐野常民がパリ万博で赤十字と出会い、敵味方の区別なく人を救う理念に感銘を受けて日赤がつけられた背景を思えば、世界の人々が赤十字と出会う機会となる万博に、大きな意義を感じます。また、大阪・関西万博が掲げる「いのち輝く未来社会のデザイン」というテーマも、赤十字の「人

間のいのちと尊厳を守る」という人道への思いとつながるものだと考えます。

今回の赤十字パビリオンの目玉であるドームシアターでは、今、紛争や災害で苦しむ人々に寄り添う赤十字の活動をリアルに感じられるコンテンツを準備中です。加えて、このパビリオンは、運営スタッフが全て日赤の職員と赤十字ボランティアであることも特徴です。日赤ならではの「手作り」とも言えるような思いを込めた空間に来場いただき、メディアを通じた情報だけでは分からない、日赤スタッフの「熱」にも触れてもらいたいです。

現在、万博準備室の公式SNSでは、紛争地で苦しむ人々やそこの赤十字の活動、国際人道法の



ガザにある赤十字の野外病院で誕生する命を伝える記事より

万博準備室 SNS

X @Expo_RedCross



Instagram @expo2025_redcross



ことなどについても発信をしています。これからさらに、パビリオンの詳細や見どころ情報が解禁されていきますので、ぜひチェックしてください。

TOPICS

阪神・淡路大震災から30年 あ那时候、赤十字ボランティアは

1995年1月17日に発生し、6400人以上の死者、80万人もの被災者を出した阪神・淡路大震災。戦後初の大都市直下型地震災害として多くの教訓がもたらされました。日赤は全国から救護班を派遣、要員数は6000人に及び、赤十字ボランティアも発災当日から炊き出しや救援物資の搬送、救護班への同行

支援などの活動に従事しました。なお、この年は、全国から支援に駆けつけた人々の活躍により「ボランティア元年」とも呼ばれましたが、ボランティア希望者が殺到した場合の窓口業務や、人員の振り分け・コーディネートなどに課題が見つかり、これらの経験が、現在の災害支援体制の構築に活かされています。



元気を届けたいと、餅つき大会を企画



歯科診療ボランティアで
医師・歯科衛生士が巡回



発災から3日後、バイクで救援物資を運ぶ
赤十字ボランティア

赤十字ボランティア活動の一例

- ☑ 1/17から約1週間、神戸市周辺の25の地域奉仕団が避難所で炊き出しと救援物資の配分を実施
- ☑ 3月末までに兵庫県内の各奉仕団が『赤十字まごころサービス』として提供した炊き出しは、延べ回数63回、ボランティア数765人、提供数2万6550人分(兵庫県支部)
- ☑ 大阪府内8地区の地域奉仕団が発災2日後の19日に、おにぎり1万7239個を芦屋市に送る(大阪府支部)
- ☑ 芦屋市と神戸市灘区にて、特別奉仕団の医師延べ90人、歯科衛生士など49人が歯科診療を実施。患者数297人を診察(大阪府支部)
- ☑ 餅つき大会や鍼灸マッサージ、演奏会など、延べ51カ所の避難所で4万259人を対象にリフレッシュを目的としたイベント型の活動を実施(大阪府支部・和歌山県支部)
- ☑ 芦屋市の仮設住宅では生活介助を必要とする高齢者に対して、約8カ月間、部屋の片付け、買い物の手伝い、入浴介助などのケア活動が行われた(大阪府支部)
- ☑ 県外から特色のある炊き出しも。うず潮鍋の炊き出し1000食(徳島県支部)、あなご飯300食・網めし300食(広島県支部)など

献血ハートフルストーリー vol.13

このコーナーでは、血液事業に携わる日赤職員、ボランティアさん、献血協力者などの人たちが、日々どのような思いで血液事業に取り組んでいるのかを紹介していきます。

「献血してると健康的になるよ!」が誘い文句です



今月のひと

profile
献血協力者
だいますけ
ルメ 大典さん

ぼくが10歳のころの記憶ですが、献血する両親に連れられて献血ルームに行ったのを覚えています。家族が献血をする環境だからか、16歳の誕生日を迎えたときに自分で調べて献血を始めました。とくに社会貢献しようとか意気込みがあったわけではなく、「16歳から献血できたな」と、ふと思いついたんです。それ以降、

献血に行ける時間があったら献血に行く、しかも友人も誘って行くので、周囲からは「あいつは献血好き」と認知されていました。

献血ルームに通ううちに、献血の知識が増えていきました。例えば、献血の血液は全て患者さんに届いていると思っていたけれど、血液はいくつかの種類血液製剤になり、そしてそれには使用期限がある。だから、継続的に献血する必要があるのだと。一時は、転居で環境が変わり、子どもも生まれて献血に行けない期間がありました。最近、職場が週休2日になったことから、回数制限の中でできるだけ献血する生活に戻りました。献血はきっかけさえあればできることだと思います。周りには、僕に誘われて初めて献血した、という人も多いです。献血をしていると食べ物に気をつかうようになるし、「献血⇄新しい血がつけられる」の良い循環

環があるという気がして、献血していると健康的になるよと誘っています。献血前に食事に注意していたら、母から「そこまでやるの?」と驚かれたことがありますが、そんな母も、かつては献血をしたいのに貧血がみだからと献血前に栄養価の高いものを食べていたんですよ。献血することが日常になると、そうなるんですよ。無理はしないで健康的でいられるから、これからも続けたいですね。



Area News

エリアニュース



全国各地、あなたの生活のすぐそばで日本赤十字社の活動は行われています。

Area News



皇后陛下からご下賜 ゆずの手拭いに施設入所者も笑顔



12月9日、日赤名誉総裁である皇后陛下から、600本の日本手拭いが特別養護老人ホームなど全国5施設の入所者などに下賜されました。手拭いのご下賜は、昭和24年に香淳皇后が始められ、代々の皇后陛下に引き継がれて、今年で69回目。皇后陛下のお誕生日に合わせて賜ります。今年は、皇后陛下自らが選ばれたゆずの絵柄で、冬の寒さの中にも温かみを感じさせるデザイン。受け取った入所者は、「きれいな柄の手拭いでうれしいです。ありがとうございます」(福岡県・大寿園 木下千尋さん)、「ありがたいです!大切に使います」(鹿児島県・錦江園 小平ツアエさん)など、感謝の言葉を寄せました。



「他県のメンバーと活動したい!」 大分・熊本の合同JRC交流会



モルックを体験する生徒たち

11月10日、日赤大分県支部と熊本県支部合同の青少年赤十字(JRC)高校生メンバー交流会が行われました。これは、コロナ禍や台風などで自粛や中止が続いた状況を経て、今年、念願叶って開催されたトレセンで、生徒たちから「他県のJRCと活動してみたい」という声が上がリ、初めて企画されたもの。大分県と熊本県の間接地・阿蘇市にある研修施設に集まり、大分県が認定する防災リーダー校のJRCメンバーからは防災減災の活動報告、熊本県のメンバーからは点字レクチャーや、障害者も楽しめるスポーツとしてポッチャやモルックなどの体験企画があり、それぞれの活動への理解を深め、活気ある交流会となりました。

「はたちの献血」キャンペーン

ヒーローは、ぼくらの中に流れているんだ。



「はたちの献血」キャンペーン 実施期間: 2025年1月1日(水) ~ 2月28日(金)

「はたち」の若者を中心に、献血への理解と協力を呼びかけるキャンペーンを今年も開催。特設サイトでは人気イラストレーター・浦浦 浦さんによるアニメーションやキャンペーンをご案内しています。

「自分が役に立てることって?」なんて、難しく考えていたけれど。ぼくらの持っているものが、誰かの力になるかもしれない。「はたちの献血」キャンペーン特設サイトをぜひご覧ください。



学生と地域住民が一体に 赤十字防災セミナー



日赤秋田県支部では、11月13日に湯沢市立稲川中学校で開催された「防災まちづくり」研修の中で、赤十字防災セミナーを実施しました。この研修には、全校生徒、地域住民、稲川地区の消防・警察など、総勢200人が参加。グループに分かれ、大地震後の避難所生活をカードゲーム形式でシミュレーションする「ひなんじょ たいけん」を通して、避難所における自助・共助の重要性を学びました。グループは学生と地域住民の混合で編成され、最初は互いに緊張した様子だったものの、話し合いを重ねるうちに交流が深まって活発に意見を出し合うようになり、生徒と住民が一体となって防災意識を高めることができました。防災セミナー後、地域の代表者は、「いつ起こるか分からない大規模災害に備える大切さが分かった」と感想を語りました。



5年ぶり! 大韓赤十字社との ボランティア交流会



11月26日~29日、大韓赤十字社京畿道支社のボランティアと職員計8人が日赤埼玉県支部を訪問、5つの地域奉仕団と交流しました。この事業は、友好親善を図り、互いの活動から学び合うことでそれぞれの活動を推進する目的で平成18年から実施されていますが、今回はコロナ禍を経て5年ぶり。災害時に役立つ実技の研修や、春日部市の防災施設「首都圏外郭放水路」の見学、赤十字防災セミナーなどを体験。大韓赤十字社のボランティア、パク・ビョンムさんは「ボランティア同士でお互いの課題を共有でき、日本の若年層の育成事業などが参考になった」と、越谷市赤十字奉仕団委員長・西尾英二さんは「『苦しんでいる人を救いたい』という同じ思いで活動する仲間がいることを実感できた」と語りました。



首都直下型地震、大規模テロ…… さまざまな想定での訓練を各地で実施



日赤埼玉県支部では、11月2日に首都直下型地震を想定した災害救護訓練を実施。能登半島地震でも活動した救護経験豊富な日赤の医師・看護師の他、県や市の職員など約150人が参加し、連携を深めました。① また11月15日には、大規模テロに備えた国民保護実動訓練に県支部と深谷赤十字病院が参加。警察、消防、自衛隊などの関係機関約400人と共に、重症者を県防災航空隊のヘリコプターで搬送するなど、一連の流れを確認しました。②

香川県支部は、11月10日に中国・四国ブロック緊急消防援助隊合同訓練に参加。化学物質などによる多数傷病者対応や、津波漂流・孤立者の救出などを想定し、救護班がトリアージや搬送の流れを確認しました。③ 静岡県支部では、11月16、17日に合同災害救護訓練を実施。日赤東海・北陸・長野8県支部の救護班が浜松赤十字病院に集結しました。訓練には日赤救護班の他、行政、DMAT、ボランティアなど約300人が参加しました。④

作家・植松三十里さんが赤十字情報プラザに来館



数々の傑作歴史小説を世に送り出してきた作家の植松三十里さんが、日赤本社「赤十字情報プラザ」に来館。昨年7月に上梓した「鹿鳴館の花は散らず」(PHP研究所刊)のヒロイン・鶴志看護婦人(赤十字ボランティアの先駆け)の史料を見学しました。侯爵夫人であった榮子は「鹿鳴館の花」と謳われ、明治政府の外交策に貢献する一方で、日赤を支援し看護師の育成にも尽力した人物。さまざまな歴史資料を基に創作された同作品には、日赤の創設者・佐野常民の活躍も描かれています。

5名様にサイン本プレゼント



天皇皇后両陛下から御下賜金

12月23日、天皇皇后両陛下から、日本赤十字社の事業奨励のために金一封を賜りました。この御下賜金は、災害等による被災者救済事業のための資金として使用されます。

常任理事会開催報告

令和6年12月20日、令和6年度第8回の常任理事会が開催されました。今回の常任理事会では、日本赤十字社創立150周年プロジェクトにおける将来構想策定の取り組み、気候変動対応にかかる日本赤十字社のアクション・プランの策定についてそれぞれ報告しました。

PRESENT!!

クイズに答えてプレゼントを当てよう!

Quiz

冬は窒息の事故が多発する季節。お餅を喉に詰まらせ、咳もできないとき、正しい応急手当は次のどれでしょう?

A. 掃除機で吸う I. 白湯を飲ませる U. 背中を強くたたく

ヒントは右の二次元コードから▶▶▶

日赤の各支部では気道異物除去も学べる「一次救命処置」の講習を開催しています!

プレゼント

アイリスオーヤマ ハイブリッド加湿器

7名様に当たる!

ヒーターで温めた水を超音波で超微細ミストにして噴霧する「ハイブリッド加湿器」。タンクを持ち運び手間もなく、上部のフタを開けてそのまま給水することが可能。専用のアロマトレーにお好みの香りを入れることで、加湿しながら香りを楽しむことも。

容量: 5L/30畳まで対応
本体サイズ: 幅約20cm×奥行約22.6cm×高さ約32cm

プレゼント応募方法

プレゼント希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・WEBでご応募ください。

①お名前 ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢 ⑤赤十字NEWS1月号を手にした場所(例: 献血ルーム) ⑥希望のプレゼント名 ⑦クイズの回答 ⑧1月号読者アンケートの回答

※ご応募いただいた個人情報(住所)はプレゼントの発送および弊社からのお知らせのみに利用いたします

⑨1月号読者アンケート質問項目

[A] 日赤の「会員」ですか
A. 会員(年間2千円以上の寄付を継続している。但し、義援金を除く) I. 会員ではない

[B] 赤十字について知っている活動はどれですか(※下記記載からA~Kの文字をご記載ください。複数選択可)
A. 国内災害救護 I. 国際活動 U. 赤十字病院 E. 看護師等の教育 O. 献血(血液事業) K. 救急法等の講習 N. 青少年赤十字 K. 赤十字ボランティア G. 社会福祉

[C] 今月号の赤十字NEWSをお読みになって、以前よりも赤十字活動全体についての理解が深まりましたか
A. とても理解が深まった I. ある程度理解が深まった U. すこし理解が深まった E. 以前と変わらない

[D] 興味・関心を持った記事・企画はどれですか
A. 特集 I. TOPICS U. 万博と赤十字 E. 献血ハートフルストーリー O. エリアニュース K. プレゼント N. ワールドニュース

[E] 赤十字NEWSの適切な大きさは
A. 今のまま I. A4サイズ U. 小冊子(A5 148×210mm)サイズ

[F] 赤十字NEWSの発行回数は何回がよいですか
A. 月に1回 I. 2か月に1回 U. 3か月に1回 E. 半年に1回

[G] 赤十字NEWSの記事をスマートフォンやパソコン(オンライン)で読みたいですか、いまままでどおり紙で読みたいですか
A. オンライン I. どちらかというオンライン U. (オンラインと紙の)両方 E. 紙 O. どちらかという紙

[H] その他、赤十字NEWSに関するご意見、ご要望(任意)

郵送/〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS 1月号プレゼント係

WEB応募/下の二次元コードからご応募ください。

1月31日(金) 消印有効

※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代わらせていただきます

ご応募はこちら

世界の赤十字が集結。「赤十字国際会議」がジュネーブで開催 国際会議で提言「初等教育から人道法を」



下記の本会議に先立ち、同じくジュネーブにて国際赤十字・赤新月社連盟総会と、国際赤十字・赤新月運動代表者会議が開催された。赤十字運動の共通課題を議論する代表者会議では、清家社長から核兵器廃絶への取り組みに「ネバーギブアップ」というメッセージが発信された



IFRC総会で発言する清家社長

第34回赤十字・赤新月国際会議が、10月28日から31日にかけて、スイスのジュネーブで開催されました。本会議は、4年ごとに開催するもので、赤十字国際委員会(ICRC)、国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)および赤十字・赤新月社の各国代表に加え、ジュネーブ諸条約締結国政府の代表が参加する国際赤十字・赤新月運動の最高議決機関です。今回は、下記の5つの決議が採択されました。

- 国際人道法の遵守に向けた普遍的な文化の醸成
- 武力紛争中のICT活動による潜在的な人的被害からの民間人およびその他の保護対象者・対象物の保護
- 包括的な法的・規制枠組みによる災害リスクガバナンスの強化
- 地域のリーダーシップ、能力、基本原則に基づく人道支援の強化と、レジリエンスの実現
- 激甚災害の人的影響から人々を守る：予測型行動の強化に向けた協働



「初等教育から人道法を」 日本赤十字社・清家篤社長が発言

決議「国際人道法の遵守に向けた普遍的な文化の醸成」では、世界各地で起きている武力紛争の深刻な人道的影響について深い懸念を表明し、国際人道法(IHL)の遵守が、**武力紛争の影響を受ける人々の苦しみを軽減し、戦争の人的、経済的、社会的、文化的、環境的コストを削減し、持続可能な平和への復帰を促進するために不可欠であること**が強調されました。

就任後初めて赤十字国際会議に参加した清家篤日本赤十字社社長は、本決議案を受けて、「**国際人道法の基礎を足元から確固たるものにするためには、教育が欠かせない**」と、初等教育から国際人道法を学ぶことが大切だと発言。「その知識をもって、一人一人が国際社会の一員として非暴力や人権尊重の文化を育み、恒久の平和について探求し続けてほしいと願います」と呼びかけました。



日本赤十字社と日本政府が 共同誓約を発表

また、日赤は日本政府と共同誓約を発表。

- 1 IHLの誠実な履行の重要性およびIHLに関する理解の向上の必要性に鑑み、特に武力紛争下における性的暴力ならびに人道支援関係者およびその施設への攻撃の防止を念頭に、公教育等を通じたIHLの普及により日本国内の世論喚起を図る。
- 2 IHLの普及やIHL国内委員会等の活動を通じて、武力紛争下におけるサイバー空間を用いた戦闘および新興技術を備える新たな兵器の使用に関する諸問題について、各方面による研究および対話を促進する。
- 3 ジュネーブ諸条約および同追加議定書に規定する赤十字・赤新月標章および文民保護標章を含む特殊標章の更なる普及に努める。

以上3点について、誓約しました。

国際人道法の普及強化を 共に進めていくために

外務省 総合外交政策局
人権人道課 主査

やました わたる
山下 渉さん



私が在籍する外務省総合外交政策局人権人道課は、人権・人道(難民問題を含む)に関する外交政策の策定や調整を行っており、いわゆる「国際人道法」も所管しています。また、ジュネーブで開催される人権理事会やニューヨークの国連総会において、人権問題について議論を重ねています。このため、日赤とは、国際人道法を普及するという点において日頃から協力関係にあります。

今回の赤十字国際会議の5つの決議案の中で、私たちは国際人道法に関わる2つの決議を担当しましたが、人道という普遍的なテーマであっても各国の合意点を見出すのは難しいものです。各国の抱える事情や政治的背景が異なるがゆえに、国際人道法の解釈は国によって違います。その国ごとの国際人道法の解釈がある中でも、集まっ

て議論を交わすことで、お互いの理解も深まりますし、違う視点の認識に気づくこともあります。互いの意見を知る機会になるからこそ、**赤十字国際会議は赤十字の活動の羅針盤**となるのだと、今回の参加であらためて感じました。

日本政府代表団の一員として参加した赤十字国際会議でしたが、今回特筆すべき点は、日赤と共に「**国際人道法の普及強化のための日本政府および日本赤十字社の共同誓約**」を発表したこと。今後、国としても、学校教育に国際人道法の学びを取り入れることを含め、より多くの人に国際人道法を知っていただく取り組みを行っていく、と宣言しました。国際人道法には、紛争下で医療関係者等を識別・保護する赤十字や文民保護のための標章(マーク)の取り決めも含ま

れています。今、世界で起きていることと向き合い、今こそ人道の理念の普及に力を注ぐべき、と感じています。この取り組みは私たちの力だけで成し得るものではありません。今後、日赤とも協力し、人道に関わるあらゆるアクターの知恵と力を結集して進めていくことが重要であると考えています。



赤十字国際会議(起草委員会)での1シーン。各国の代表が立ち上がり、侃侃諤諤の議論を交わした